

寺、宝塔寺、あるいは日本ではじめて人体解剖を行い、その成果を「蔵志」としてあらわした山脇東洋の墓など数多くの古社寺や、史跡に恵まれている、いわば歴史の宝庫である。

これら日本でも超一流の文化財の中にひっそりと隠れて、味のある史話やそれなりの由緒をもった仏閣神社や石仏が意外と多く、一つ一つの石仏が自然石の特徴を生かしながら静かに姿をあらわしている。

伏見稲荷からわずかに入り民家の中を抜けると通称「ありの山」墓地を見ることができる。「ぬりこべ地蔵」は、この「ありの山」墓地の一角にひっそりと佇んでいる。もとは、稲荷西方、警察学校付近にあったが、軍用地ということで立ち退きとなり他の墓とともに移ってきた。

その名の由来は、歯の痛みを封じ込めるの意味につながるという人もいる。決して立派なたたずまいではないが歯痛を鎮めるのには、大変なご利益があるといわれている。道行く人々が立ち止まり歯痛治療に霊験あらたか、と素通りしないで、まずは参詣と手を合わせてゆく姿がみうけられ、なごやかな雰囲気をかもしだしている。

寒さのきびしい京都では春になると参拝者も多くなるためにこの頃を見計らって付近の清掃を兼ね「ありの山」墓地あたりを散策するのが常となっている。

さらに毎年6月4日には遠方からの参拝者も集まり「ぬりこべ地蔵尊・歯の供養祭」が営まれる。この供養祭では全国各地から送られてきた歯の治療を願うハガキや礼状も合わせて供養がおこなわれる。いつのころからか、年に5-600通の手紙が送られてくるようになり、供養祭の参加者も100名を越えるようになりテレビ局も取材におとずれていた。いつの頃からかは定かではないが今では「京都市ぬりこべ地蔵様」のみの宛名で手紙が届いてしまうほどに全国にその名がとどろいている。

歯痛の悩みをかかえる人の願いは、いつの時代も変わりはなく、今では歯の治療を願う葉書や礼状、果ては年賀状も舞い込んで来るお地蔵様を紹介した。

39) 「湯島聖堂に祭祀される神農像をめぐって」

On “An image of Shinnō in Yushima temple”

池園歯科研究会 ○藤野 珥男

手塚 裕文

斎藤 憲一

西村 好一

小林一日出

飯渕 義久

植木 清二

湯浅 高之

荒井 照夫

日本歯科大学 屋代 正幸

Yoshio Fujino, Hirofumi Tezuka, Kenichi Saito, Koichi Nishimura, Kazuhide Kobayashi, Yoshihisa Iibuchi, Seiji Ueki, Takayuki Yuasa, Teruo Arai, Ikezono dental research group Masayuki Yashiro, Nippon Dental University

江戸時代、医家や薬種商などには、必ずといっていいほど「神農像」が祭られていた。

神農は、もともと古代中国の伝説上の人物で山野をかけめぐり、草木をむちで打ち折って採集し、それをなめて効能を調べ、次々と薬草を発見したので医薬の祖といわれている。

現在、東京都文京区湯島の湯島聖堂大成殿のかたわらの神農奉祀庫に安置されている「神農像」は、日本における「神農像」の中でも古い時代のもので、重要文化財の指定こそ受けていないもののその像貌からして国宝級の木像といっても過言ではない。

この神農像の由来や祭祀の変遷については矢数道明博士の研究論文に詳しい。

演者らは、昨年(2019年)の11月23日(勤労感謝の日)、例年この日に執行される「神農祭」に参列する機会を得、その像を間近に拝することができた。

その折に、像の左手に握られている枯草に注目をした。その発端というのは、演者が以前湯島聖

堂で求めた絵葉書からである。その絵葉書の「神農像」の左手には稲穂が握られていた。しかし、現在の像では枯草にかえられている。このあたりの事情とその枯草は何であるかを検討した。

また、連綿と受け継がれているこの「神農祭」がたいへん意義深い行事であることを再確認した。

40) 腹證と歯痛について

Studies on the Fukushou and Toothache

日本歯科大学 ○西巻 明彦
屋代 正幸
池園歯科研究会 飯渕 良幸
百瀬 深志

Akihiko Nishimaki, Masayuki Yashiro, Nippon
Dental University
Yoshiyuki Iibuchi, Fukashi Momose, Ikezono
dental research group

日本漢方の診断の特徴は、證を決定するにあたり、中国の脈診に対して腹診を重視することにあると言われている。腹診は、腹の病状を調べるだけでなく、腹の状態を通じて全身の生命力、生活力の異常を観察すると同時に薬方の指針となる。このような診断法は、江戸時代古方派の医師達が広く普及させたと言われている。わが国における代表的な腹診書は稲葉克文札の腹證奇覽（全四巻、1800年刊行）と和久田寅叔虎の腹證奇覽翼（全八巻、1809～1853年刊行）であり、本書はユ

ニークな腹證図を掲げ、その図に対する解説を行っている。基本理念は張仲景の傷寒論に準拠している。

歯痛については腹證奇覽に認められないが、腹證奇覽翼の大柴胡湯の證（二編下冊）、白虎湯の證（二編下冊）、大承気湯の證（三編上冊）、調胃承気湯の證（三編下冊）、桃核承気湯の證（三編下冊）、黄連湯の證（四編下冊）などに記載されている。特に白虎湯の證に「歯痛熱證に用いて可なり。」、調胃承気湯の證に「歯痛寒熱二證あり誤診すべからず。」、黄連湯の證に「歯の痛み寒熱あり、一定すべからず、まさに證に従うべし。」とあり、歯痛の寒熱について繰り返し述べられている。一般に歯痛は胃熱（脾胃の熱）が原因で起こると言われているが、寒證の歯痛があると指摘し、寒熱は錯綜した證候もあるので、證に従って投薬すべきと腹診の重要性を述べている。

有持桂里は稿本方輿輓（江戸時代末期）における牙齒門において、歯痛についてかならずしも清熱剤を投与するのではなく、腹診などにより證を決定し投薬することは、何ら他の疾患と変わらないと記載している。稿本方輿輓と腹證奇覽翼は、歯痛の投薬について腹診も参考にすべきという点では一致しているが、稿本方輿輓の記述はより具体的で優れていると考えられる。このような、腹診と歯痛について述べられている和漢書は少ないが、全身的な診断から歯痛を治療していく概念は、東洋医学と西洋医学の立場を異にしているとは言え、今日の医科歯科一元論に通じるものとも考えられる。